

## 大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討(1): みそ汁作り・お弁当交流会の事例から

著者	尾島 恭子, 綿引 伴子, 滝口 圭子, 松田 洋介, 橋本 正恵, 中田 泉, 西多 由貴江
雑誌名	教育実践研究 = Studies in practical approaches to education
号	40
ページ	27-36
発行年	2014-10-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/40728">http://hdl.handle.net/2297/40728</a>

大学・附属学校園の幼小中連携活動の検討（1）  
：みそ汁作り・お弁当交流会の事例から

尾島恭子・綿引伴子・滝口圭子・松田洋介・橋本正恵・中田泉・西多由貴江

An Inquiry on a Collaborative Study of University and Attached Schools (1):  
Miso-Soup-Making and Lunch-Time Interactions

Kyoko OJIMA, Tomoko WATAHIKI, Keiko TAKIGUCHI, Yosuke MATSUDA,  
Masae HASHIMOTO, Izumi NAKATA, Yukie NISHITA,

本研究の目的は、幼稚園・小学校・中学校の3校種間の連携活動を実践し、その意義を検討することである。本稿では、2012年12月にみそ汁作り・お弁当交流会として実施した3校種連携の活動概要の報告と併せて考察を行った。その結果、「人とのかかわり」の視点からみた有効性やみそ汁作りを取り入れた活動の効果なども確認され、今後の活動に有益な示唆が得られた。

1. 目的と背景

幼小連携、小中一貫教育等異校種の連携について、その重要性が唱えられる中で、筆者らは試行的な連携実践として、金沢大学人間社会学域学校教育学類の附属幼稚園と附属中学校の異校種間実践を検討し報告した。そこでは、2校種間の交流について、一定の意義が確認されたとともに、その実践を踏まえたうえで、幼・小・中3校の連携について検討を進めていく必要性も講じられた<sup>1)</sup>。

本研究では、そこからさらに発展させ、幼稚園・小学校・中学校の3校種間の連携活動を実施・検討することとし、3校種連携の意義についても考察を進める。

幼小中連携については、例えば1997年度以降、幼・小、小・中、幼・小・中との組み合わせを変えながら「協働」というテーマのもとで検討をすすめてきた例<sup>2)</sup>や、もっと長いスパンで幼稚園3歳児から中等教育6年生（高等学校3年生）までの15年間を通して、事物認識とそ

の表現の発達を促すための新たなカリキュラムの編成に取り組んだ例<sup>3)</sup>、ほかにも2002年度以降幼少中連携の一貫教育を検討し続け、近年は「主体性」をキーワードとして研究を進めている例<sup>4)</sup>、などのように、異校種間が連携してカリキュラムの構築をめざす研究・活動例は多くみられる。

ただし、筆者らのグループの一連の研究目的は、最終的に一貫したカリキュラムの作成を目指すものではなく、異校種が同一の学習の場において実践を共にすることで、今まで顕在化されてこなかった学習効果あるいはその活用の有効性を見出すことにある。

本稿では、その一環として実施した活動事例の概要を報告するとともに、本事例の実施の意義及び課題を検討する。その際、前述の実践<sup>5)</sup>において、特に幼稚園の学習内容の「人とのかかわり」も重要な柱として組み入れて進めていたことから、その発展的な連携活動として「子ども間のかかわり」に着目して検討を進めた。

また、今回の実践では「みそ汁づくり」を3校種の連携活動に取り入れる計画となったが、その成果についても併せて検討していきたい。

なお本研究は、金沢大学学校教育学類・附属学校園研究推進委員会の技術・家庭科小委員会（委員長；綿引伴子）にて2012年度の連携事業を検討する中で着想し遂行されたものである。

## 2. 研究計画・研究方法

本研究における連携事業を進めたメンバーは、先述の通り、技術・家庭科小委員会所属であり、当初は家庭科の教科内容に関わる連携活動の模索から始めた。しかし、本研究においては、当該活動を無理なく実践するために、学校園の教員の負担感にも配慮し、各人が意欲的に取り組めるような連携の在り方を優先させたため、家庭科の学習内容の検討を主として進めていくのではなく、家庭科を足掛かりにして各校園で実施が可能な内容を検討していくこととした。その結果、小学校・中学校とも家庭科教員が担任を務めるクラスでの実施が適当であったため、小・中は1クラスの実施となり、それに応じて活動の目的も吟味していくこととなった。なお、今回の実施学年は幼稚園年長2クラス45名、小学校3年生1クラス33名、中学校3年生1クラス38名である。まずは幼・小・中そして大学の教員で話し合い、本実践の進め方の概要を確認した。基本的には図1のように、小・中学生が主体となって会の検討・企画を行い、幼・小・中学校教諭はアドバイス・支援する立場をとる。児童生徒には主体的に参加することで問題解決的な力の育成も意図したからである。

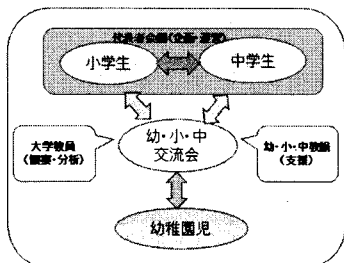


図1 連携活動の概要

また、大学教員は、企画の段階から交流までビデオ撮影・参与観察を行うと同時に、小・中学生に実施の前後に行う質問紙調査を用いて、連携活動の意義・課題を分析した。本稿の分析では小・中学校の児童生徒を対象とするが、幼稚園児については別稿で論じる。

## 3. 実施内容

具体的には、前回の実践<sup>6)</sup>からの展開として、お弁当交流会を組み入れて、さらに幼・小・中がかかわれる「企画」を、小・中学生が考えるようにした。小・中学生は男女2名ずつを各クラスの代表者として選出し、代表者会議を設置した。その後はその代表者同士の話し合いと、それを各クラスに持ち帰りクラスでの話し合いで進めた。交流会の実施日は2012年12月11日の11時35分から13時25分である。

### (1) 事前の準備・話し合い

小・中学生の代表者会議のスケジュールについては、表1のとおりである。今回交流会を実施する3校園は、同一敷地内にある。代表者は朝登校後、授業開始前の30分程度中学校にて話し合いの場を設けた。そこで企画を練り、それを小中の各クラスへ持ち帰りクラスで検討し、さらに代表者会議で検討することを繰り返した。

代表者会議での話し合いの結果、お弁当交流会に加える「企画」の部分の活動は、みそ汁作りとなった。また、アイスブレイクとして、クリスマスツリーの台紙にシールを貼る作業を取り入れることとなった。

当日の活動としては、図2のように、4つの活動（クリスマスツリー作り、みそ汁作り、お弁当交流会、片付け）から構成されている。先述のとおり、教師は支援する側で、企画は児童生徒に任せる方針をとっていたため、教師は代表者会議の場ではほとんど意見を出さず、主として中学生が話を進めた。

日程		参加者(児童・生徒)	観察者・教員(人数)	話し合いの内容
11月15日	8:00~8:30	男女各2名(計8名)	小学校+中学校+大学(3)	自己紹介。小・中とも「企画」についてクラスからの意見を出し合った結果、次回までにクラスに戻り再検討することとなった。
11月21日	8:00~8:30	同上	小学校+中学校+大学(2)	みそ汁を作ることに決定。
11月30日	8:00~8:30	同上	幼稚園(3)+小学校+中学校+大学(3)	具材の決定。
12月5日	8:00~8:30	同上	幼稚園(3)+小学校+中学校+大学(3)	スケジュールの確認。進行・準備の確認。
同日	昼休み	中学生	幼稚園(3)+中学校	中学生による幼稚園教諭への説明。
12月10日	8:00~8:30	男女各2名(計8名)	小学校+中学校+大学(2)	当日の進め方についての具体的な打ち合わせ。
12月11日	11:35~13:25		交流会当日	
12月12日	8:00~8:30	同上	幼稚園+小学校+中学校+大学(2)	感想・反省。

表1 代表者会議での検討日程

## (2) 当日の活動

当日は、図2に示した内容でグループ毎に進められた。各グループは幼稚園児3~4名、小・中学生各2名程度、計7~8名の人数である。中学校のホールにて実施されたが、本ホールはもともとランチルーム用に設計されたもので、手洗い場もあり、今回の利用に適した場所であった。中学生の代表者が全体の司会進行を務め、その指示に従って活動が進められていた。なお事前の代表者会議において、各グループで小学

生は「具の切り方を園児に教える」「みそ汁をよそう」担当となることを決めていたため、家で具をちぎる練習をしてきた児童もいた。中学生は幼小全体を見ながら、指示を出したりサポートしたりしていた。また、園児の前で火を取り扱うのは危険との判断から、中学生が離れた場所で鍋を火にかけ、出来上がった後で鍋を各グループの机にもってきた。

以下の写真は、当日の様子である。

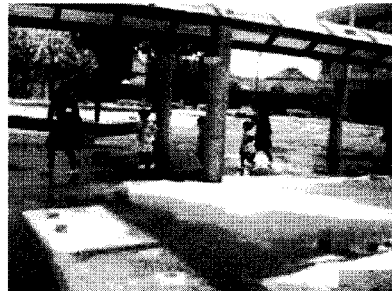


写真1 中学生に連れられ会場に来る園児達

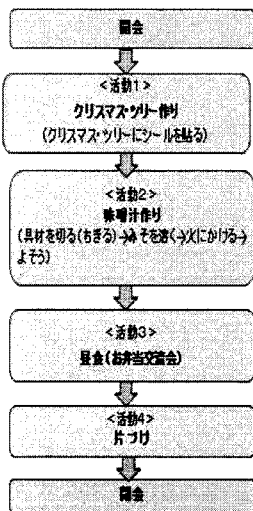


図2 活動内容



写真2 活動1のクリスマスツリー作り



写真3 みそ汁作りの全体説明



写真4 活動2のみそ汁作り(具をちぎる)



写真5 活動2のみそ汁作り(みそ汁をよそう)



写真6 活動3のお弁当交流会

#### 4. 分析・考察

(1) 「人とのかかわり」について

##### 1) 観察記録分析

当日は観察者として大学教員が4つのグループ(ABCD)に対してビデオ撮影を行いながら子どもたちの様子を確認した。今回は中学生が活動をリードするため、中学校の担任に生徒の普段の人とのかかわり方を聞き、A:人とのかかわりが積極的であると考えられる中学生男子のいるグループ、B:人とのかかわりが積極的であると考えられる中学生女子のいるグループ、C:人とのかかわりが消極的であると考えられる中学生男子のいるグループ、D:人とのかかわりが消極的であると考えられる中学生女子のいるグループ、の4つを観察した。(なお、Dグループについては記録が不十分であったため、分析から除いている。)

図2に示した活動ごとに、各観察者がそれぞれのグループの状況を観察し、記録した。表2はその記録から、グループ選定の対象となった中学生のかかわりに関する記述を中心に記したものである。

表2に記したグループごとの記録から、ABCの各グループの「人とのかかわりに積極的・消極的」な生徒の対応が確認できる。今回は小・中学生が企画するという位置づけであったものの、実質は中学生が進行役を担っていたため、進行役である中学生のかかわり方によってグループの雰囲気が大きく異なっていた。実際、各グループの様子については、Aグループでは当該グループの中学生男子(積極派)のおかげか、中学生女子も途中からかかわりが増えた。なお、Aグループには中学生と小学生に偶然同じ名前の女子がいたことで、特に小学生女子は大変印象深かったようで、当日の日記(小学校で毎日記す日記)に「奇跡の…」とのタイトルで今まで書いたことのない長さの文章を書いていた。人との距離を縮める要因として「同じ名前」というのは影響が大きいことを実感した。

Bグループは、全員に笑顔が見られ全員が参加して楽しんでいる様子だった。一番の要因は、中学生女子の役割が大きかったことであろう。始終笑顔で接し、園児3人と小学生2人への目配り気配りができ、できるだけ皆がみそ汁づくり（準備・後片付け）や会話に参加できるように指示していた。しかも、強制的な指示ではなく、さりげなく言葉をかけて促していた。

Cグループでは、中学生男子は園児・児童に関心を持ちつつ中学生としての責任を果たそう

と心掛けていたものの、コミュニケーションの取り方に戸惑いがあったようにも見受けられた。中学生女子は園児・児童に気配りをし、様々な指示していたが、グループ全体の印象でいえば最後まで楽しそうには感じられず、小学生にも最後まで笑顔がみられなかった。このグループの小学生は食事が終わるころからほかのグループに出かけて行ってしまった。自身のグループで園児・中学生とかかわろうとする意識が弱かったのかもしれない。

＜活動1：クリスマスツリー作り＞	
A	中学生男子はツリーが描いてある画用紙を園児の前に持ってきて、「これ、何かわかる？」と問いかけ、園児と笑顔でやり取りをすところから始まる。
B	中学生はあまり手を出さずに小学生と園児の様子を見守る様子である。
C	中学生男子が園児に説明をしているが、笑顔はみられない。
＜活動2：みそ汁作り＞	
A	中学生男子が「うまいね」「こぼさんようにな」など、幼児への声かけを頻繁にしている。また、園児が乱暴に混ぜてこぼれた味噌をすかさず布巾で拭き取ったりと、よく気がついている。
B	中学生女子が指示する。味噌を溶く際にも中学生女子が「交替交替でやろう」と園児に声かけをし、幼・小・中で順番に行く。よそうときは、中学生が教えて小学生がよそっていた。
C	園児が中学生男子と豆腐をちぎるが、会話は弾まない。園児同士では話しているが、小学生・中学生は会話がほとんどない。中学生女子がお椀を配ったり、進行役を担当している。
＜活動3：昼食(お弁当交流会)＞	
A	中学生男子は、笑顔で幼児にまんべんなく話しかけ、会話をしている。必ず目を見てうなずきながら聞いている。
B	中学生(男女とも)はときどき笑顔で話しかけながら食べ、園児・小学生にも時折笑顔がみられる。皆みそ汁のおかわりをした。
C	中学生女子は園児のことを気にしながら食べているが、中学生男子は会話している様子は見えない。
＜活動4：片付け＞	
A	園児間のトラブル(旗の取り合い)で、片づけに気分が乗らない子に対し、中学生男子・女子が仲裁しようと色々と話しかけている。
B	園児が中学生女子にテーブルを拭くように指示されて拭く。
C	お椀の片づけは中学生女子が声をかけながら進めて、中学生男子は見ている。

表2 グループごとの活動状況 (抽出中学生のかかわりを中心に)

とくにCグループの小学生の対応からも明らかのように、今回グループのとりまとめ・雰囲気づくりには、各人の役割意識がどのように自覚されているかが重要であると推察される。中学生は今回、最年長者として会をまとめなければならないという使命感はある程度自覚されていたように思う。そのため、どのグループの中学生も声掛けや指示などを中心的に行っていた。また、園児は最年少者として、小学生・中学生

のお兄さん・お姉さんに指示をもらいながらも、小・中学生と同じテーブルについている、という普段の園での生活とは異なった体験に緊張感をもちつつ参加していた。それに比して、小学生は今回年上として、かつ年下としての曖昧な役割(すなわち、年上の中学生に対する態度と年下の園児に対する態度を区別せねばならないという思い)が、自身の立ち位置を迷わせてしまったものと思われる。では、児童・生徒自身

は本活動をどのようにとらえていたのか。

## 2) 事前・事後調査分析

本会の前後に、児童・生徒の意識を確認するために質問紙調査を行った。その中から、まずは「人とのかかわり」の視点で「皆と一緒に弁当を食べること」についての意識をみていく。

### a.小学生

「幼・中と一緒に弁当を食べること」について、事前の調査では図3-1にある通り、55%の児童が「とても楽しみ」と答えている。

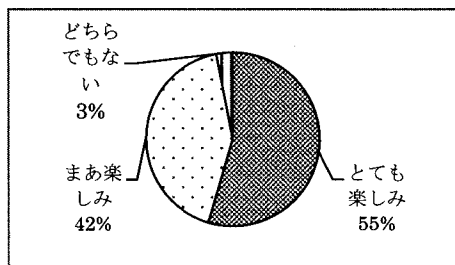


図3-1 一緒に弁当を食べること (小学生事前)

その後、図3-2に示されている通り、事後に実施した調査では、「とても楽しかった」が73%となっていた。一方で「どちらでもない」はいなかった。

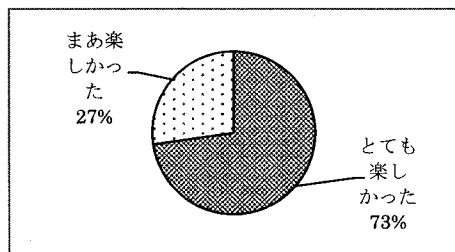


図3-2 一緒に弁当を食べたこと (小学生事後)

小学生にとって、幼稚園児、中学生とのかかわりは楽しめる結果であった。そのことについてもう少し詳細に見ていきたい。

本活動の事前・事後の調査では、「園児とのかかわり」と「中学生とのかかわり」について、児童自身の言葉を聞いた。自由記述欄を設け、事前には「どのようにかかわろうと思いますか」

事後には「どのようにかかわりましたか」を記述させた。

事前をみると「園児とのかかわり」については、やさしくする(21名)、話しかける(9名)というように、年少者への気遣いがみられる。一方で、中学生には自分から話しかける(7名)、楽しく遊ぶ、話す(7名)などの回答もあるが、言うことを聞く(6名)、言葉づかいに気を付ける(5名)、あいさつする(3名)など、年長者への気遣いもみられる。すなわち、園児へと中学生へと区別した対応を取ろうと心掛けていることが確認できる。

なお、事後をみると、園児とのかかわりについては、やさしくかかわった、教えた(12名)、楽しくかかわった(5名)、仲良くかかわった(4名)など、「肯定的」に振り返っているものがほとんどであった。また、中学生とのかかわりについては、話した(11名)、楽しく(5名)などのワードが書かれていたが、その他、仲良く、友だちみたいに、お笑いみたいに、などまとまった数とはなっていないが、肯定的な言葉が記されていた。小学生は総合的に見て園児とも中学生とも良いかかわりができたもとらえている。

### b.中学生

中学生は幼・小とのかかわりをどう見ているのか。中学生にも小学生と同様の調査を事前・事後に行った。その結果、図3-3、図3-4にもあるように、「とても楽しみ」と答えた生徒は事前には21%であったが、事後に「とても楽しかった」と答えた生徒は53%であった。

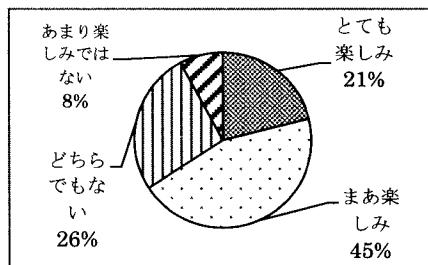


図3-3 一緒に弁当を食べること (中学生事前)

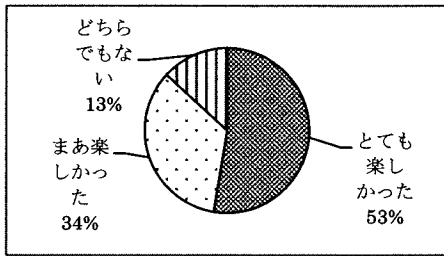


図3-4 一緒にお弁当を食べたこと (中学生事前)

続いて、自由記述欄を確認する。中学生に対しては「園児とのかかわり」と「小学生とのかかわり」について自由記述欄を設け、事前には「どのようにかかわろうと思いますか」事後には「どのようにかかわりましたか」を記述させた。結果をみると、中学生は事前の調査について、園児に対しても小学生に対しても「優しく」や「楽しく」といった年長者として年下の者への気遣いが記されていた。また、事後についても「優しく接した」「話しかけてあげた」など年長者らしい記述が多く見られた。

「人とのかかわり」については、小学生も中学生も、「楽しかった」と答える割合は事前よりも事後の方が多くなっている。ただ、小学生の方が「とても楽しみ」「とても楽しかった」と答える割合が中学生のそれより多い。その理由が、発達段階的な背景からくる差異、すなわち、中学生になると「面倒」という意識も生じてくることなどは予測できるが、加えて小学生は年下とも年上とも双方にかかわれる、ということからくる楽しみもあるのかもしれない。今後確認する必要はあろう。

## (2) 「みそ汁作り」について

本交流会で、幼・小・中でみそ汁を作ることになったが、それは先述の代表委員会で児童・生徒が決めたことである。ただし、その背景として中学生がこの1ヶ月前に家庭科の授業でめった汁を作った経験があったことは大きい。一方で、小学生は3年生であるため、5年生で学ぶ家庭科のみそ汁の学習前のため、家での経験

も含め児童たちでみそ汁を作った経験はほとんどない。みそ汁作り未経験の小学校3年生がどのように対応するのかは未知数であった。

### a.小学生

みそ汁作りについても、事前・事後にその意識を確認した。みそ汁を作ることについては、図4-1にあるように事前には70%が「とても楽しみ」と答えていたものの、「あまり楽しみではない」、「どちらでもない」と答えていたものも3%ずついた。それが図4-2の事後の調査では、「とても楽しかった」が84%となっており、「あまり楽しくなかった」はいなかった。

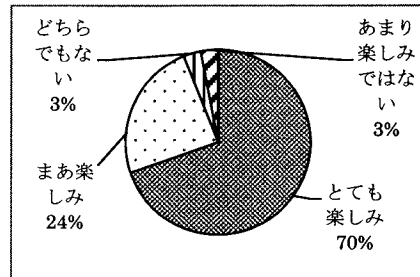


図4-1 みそ汁を作ること (小学生事前)

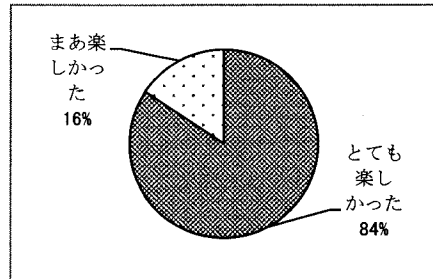


図4-2 みそ汁を作ったこと (小学生事後)

小学生にとって、みそ汁作りは未経験のため、事前には様子がわからなかったが、事後には「楽しかった」といえるイベントであったといえる。結果的にはお弁当を一緒に食べたことよりもみそ汁作りの方が「とても楽しかった」と答えた割合は多かった。それが「調理をすること」のどの経験に起因するのか、今後検討していく必要もあろう。

### b.中学生

図4-3、4-4にある通り、中学生は、事前に「とても楽しみ」としていたのは29%であ



ったが、事後に「楽しかった」と答えた生徒は52%あった。

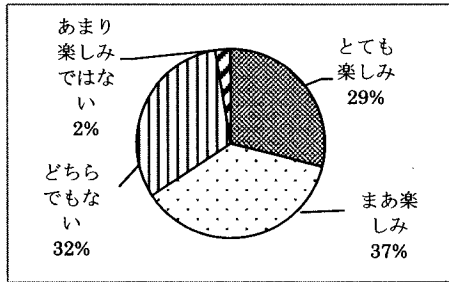


図4-3 みそ汁を作ること (中学生事前)

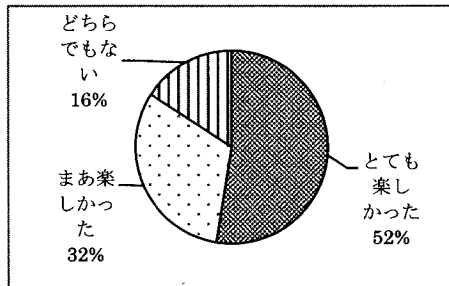


図4-4 みそ汁を作ったこと (中学生事後)

ただし、すべての生徒が単純に「楽しかった」というイベントでは終わっていない。また、小学生と異なり「とても楽しかった」と答えた割合は、みそ汁を作ったこともお弁当を食べたこともほぼ同じ割合である。さらに、どの設問においても「どちらでもない」が一定数いることも小学生と異なる点である。

(3) 児童・生徒からみた本交流会の印象

小学生・中学生に事後調査を実施した際、「一番心に残ったこと」を自由に記述してもらった。小学生は字数の少ない子で7字、多い子は88字と開きがあるが、平均すると30字程度であった。自由回答をアフターコーディングした結果、その内容については、表3-1のように、みそ汁に関することがほとんどで、「みそ汁を作ったこと」は33名中27名(8割)という結果であった。

続いて中学生についてみると、中学生の事後調

査は書きたい内容が多かったのか記述量が非常に多く、生徒の半数以上が120字以上の記述となっており、中学生自身が多くのことを感じ取ったものと読み取れる。内容としては、表3-2にあるように、みそ汁作りに関する記述も3割ほどあったものの、それ以上に「楽しかった」というような記述が多かった。

%

記述内容	小学生 (33名)
1. みそ汁を作ったこと	82.6 (27名)
2. 話したこと	15.2 (5名)
3. みそ汁がおいしかったこと	12.2 (4名)
4. みそ汁を食べたこと	9.1 (3名)
5. 弁当を食べたこと	6.1 (2名)
6. 無回答	0 (0名)

表3-1 一番心に残ったこと (小学生の自由記述より)

%

記述内容	中学生 (38名)
1. 楽しかった、うれしかった、感動した、よかった等	60.5 (23名)
2. 交流活動前後に、小学生の印象に変化あり	52.6 (20名)
3. 交流活動前後に、園児の印象に変化あり	42.1 (16名)
4. 園児や小学生との会話に関する内容	39.5 (15名)
5. 味噌汁作りに関する内容	28.9 (11名)
6. 1年間の園児とのかかわりの振り返りについての内容	7.9 (3名)
7. 無回答	0 (0名)

表3-2 一番心に残ったこと (中学生の自由記述より)

さらに、小学生とは異なり、事前・事後の気持ちの変化に関する記述も多く見られた。そこで、「気持ちの変化」に着目して分析をすすめると、小学生の記述にはほとんどみられなかった交流活動前後あるいは活動中の園児や小学生の印象の変化も記されていた。例えば「最初幼稚園児たちを迎えに行った時からみんな喋らず無表情で泣き出す子がいて大変だったけど、交流して話していくうちに、みんな笑顔で大きな声

で話してくれるようになって嬉しかった。」「小学生と話す話と、園児と話す話は結構異なると思っていたけれど、予想以上に一貫した話題が継続されていて、やっぱり園児でも僕らと通じる場所があるものだなと感じた。」「みそ汁がこぼれても怒らずにティッシュをあげていて、思っていた以上に小3は大人だと思った。」などである。

なお、園児と中学生との交流だけではなく、小学生が入っていることを評価する記述もあった。「小学生が助けになることもありました。もちろん中学生が先頭に立っているのですが、幼・中ではもっと困難だろうと思います。交流も3つ合わさっていると2つでやるよりもやりやすいと思いました。」というものである。

## 5. 本活動の省察

交流会実施の3日後に幼・小・中・大の教員が集まり、本活動を振り返った。参加した教員はいずれも本活動に関しては全員が肯定的にとらえており、園児・児童・生徒にとっても意義のある活動であったといえる。そこで本稿の目的に沿い、教員の感想も踏まえて省察を行う。

### 1) 「人とのかかわり」の視点からみた有効性

本活動による3つの異年齢集団のかかわりは、2者間のかかわりよりもさらに複雑な関係性を築くことになる。特に今回は小学生が、園児に対しては年上、中学生に対しては年下という中間的な位置づけだったため、戸惑う場面もあったと推察される。小学生としては今回のねらいを「幼・中と仲良くしよう」としており、お客さんではいられないのでみそ汁の具のちぎり方など練習してくるようになった。代表委員も練習してくることをクラスで強調して伝えていたとのことである。小学校教諭からも、児童ががんばって練習していたとの報告があった。教員の振り返りの際にも小学生としては、「練習して園児に教える」ことに自分たちの役割・使命を強く感じ、これだけはしっかりしないといけないという思い、中学生への責任があったのでは

ないか、という意見もでた。一方で、中学生とかわろうとするタイプと幼稚園児のお世話に向かうタイプに分かれており、年長者への対応と年少者への対応を同じ空間において求められるために、自身の立ち位置に戸惑いを感じていたという指摘もあった。ただ、小学生の調査結果を見ると、前述の通り肯定的な言葉が記されており、小学生は総合的に見て多くが園児とも中学生とも良いかわりができたこととらえている。観察者からみると3者の間で自身の立ち位置に戸惑い、役割を自覚できずにいたと思われる小学生の「かわり方」であったが、2者間の関係においては楽しめたと言えたのではないか。中学生は、ほとんどの生徒が幼小のかかわりを肯定的にとらえ、自由記述での約半数の生徒はかわりを通して園児や児童の認識やイメージをプラスに変えていた。

なお、前述の中学生の自由記述にも「交流も3つ合わさっていると2つでやるよりもやりやすいと思いました」と、3者間のかかわりを評価する記述があった。一方で、観察記録から明らかのように、中学生のかかわり方により園児・児童・生徒のかかわり具合や楽しさは大きく異なることがわかった。今後は、中間的な年齢層に位置する集団のかかわり方に焦点をあて、この3つの異年齢集団のかかわりについて、学習の場としての有効性をさらに検討していくことが重要であろう。

### 2) みそ汁作りを取り入れた活動

教員の振り返りの場面においても、「一緒に作る作業をするのは心がほぐれるよい活動でよかった」と評価されていた。

小学生にとって、園児・生徒とお弁当を食べることもみそ汁を作ったことも、事前には様子がわからないが、事後には「楽しかった」といえるイベントであったといえる。特にみそ汁作りの方が「とても楽しみ」「とても楽しかった」と答える割合が多かった。

みそ汁作りを「楽しい」と感じる児童・生徒が多かった理由は、一つ一つの分断された遊び

の行為からでは得られない、みそ汁を作って食べるという連続した行為から得られる楽しさといえるのではないだろうか。実際、小学生の事後の調査の「交流会の間、幼稚園児・中学生とどのような話をしましたか」という質問に対しては、みそ汁に関する回答が最も多く、15名(約半数)という結果がみられた。みそ汁を作って食べるという一連の流れは、会話のきっかけや内容を作り出すことにもつながったと思われる。ただし、小学校3年生はみそ汁作りを経験していないことが、自分たちが「企画している」という自覚を持たせるのにはマイナス効果だったとも考えられる。それは代表委員会の展開からも判断できるが、小学生は最初の企画提案の頃は、自分たちの意見を出していたが、いったんみそ汁作りが決まった後は、自分たちから意見を言うことも少なくなったのである。観察していた教員によれば、3年生は自分たちでみそ汁作りを経験していないため、自信がなく、発言もできなかったのではないかとのことであった。

みそ汁は多くの児童が普段も家庭で食していると思われるが、「家庭科で学んだ」という経験の有無が児童の自信の有無につながるのであれば、家庭科の学習内容の評価にもつながっていくのではないだろうか。今回、中学校家庭科での保育(幼児についての学習)や食生活(めった汁作り)が活かされており、中学生がこれらを家庭科で学んだからスムーズにできたのではないかという指摘もあった。

## 6. 本稿のまとめと今後の課題

今回、2者間ではなく、3者間の交流であったこと、また、それが異校種間の交流であったことで、普段経験できない緊張感もあり、学習の場としての有効性を確認できた。とくに、年長者(今回は中学生)のかかわり方によって、交流のあり方が大きく変わっていたことも確認できた。一方で、小学生の立ち位置が曖昧であったことが指摘された。事後の反省会でも、小学生の役割をもっと明確にしたり、もっと多く

したりするほうがよかったという意見も出ていたが、今後は役割意識の視点も入れながらさらに検討していくことが重要であろう。

また、みそ汁作りは、「楽しかった」というだけでなく、とくに「調理して食べる」という一連の流れへの評価、さらには家庭科の学習内容への評価につながることも示唆された。一方で、幼・小の調理への関わり方や幼稚園教諭への事前打ち合わせの時期など、運営面での課題も多く出された。さらに、観察対象のグループ選出にかかわる抽出生徒が中学生のみを対象といたため、園児・児童のかかわり方の違いにより、グループの雰囲気はどう変わったかの相違を検討することができなかったとの反省点も挙げられた。

今後は、今挙げた課題も含めて、さらに検討を進めていき、幼小中連携の有効な活動について確認していきたい。

1) 尾島恭子・綿引伴子・松田洋介・滝口圭子・橋本正恵・西多由貴江・中村正寛・中田泉

「大学・附属学校園における連携活動の検討：家庭科を中心とした実践事例から」金沢大学人間社会学域学校教育実践研究要旨, pp.45-53, 2013. 実践については、橋本・綿引「中学校に幼児を招こう」荒井紀子編『新版 生活主体を育む』ドメス出版, pp.189-197, 2013.も参照。

2) 浅川陽子「お茶の水女子大学附属校園(幼・小・中)の連携研究について(日本学習社会学会第5回大会報告)--(シンポジウム 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働--お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校の連携研究から)」日本学習社会学会 5, pp.5-7, 2009.

3) 奈良女子大学文学部附属幼稚園 幼年教育研究会「幼・小・中等教育学校 連携研究の概要」研究紀要(奈良女子大学附属幼稚園), 第29集, pp.1-8, 2009.

4) 竹早地区幼・小・中連携研究会「主体性を育む 幼・小・中連携の教育：連携カリキュラムを支える取り組み(研究の概要)」東京学芸大学附属竹早幼稚園・小学校・中学校研究紀要(23) pp.4-13, 2012.

5) 尾島他, 前掲書。

6) 同上。